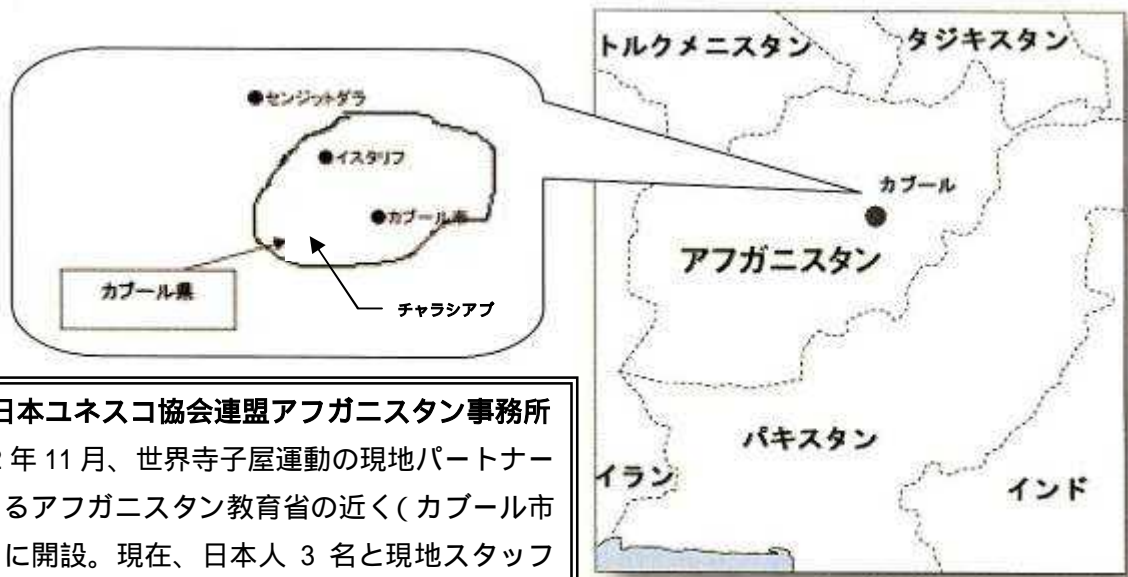


アフガニスタン 教育支援情報



日本ユネスコ協会連盟アフガニスタン事務所
2002年11月、世界寺子屋運動の現地パートナーであるアフガニスタン教育省の近く（カブール市内）に開設。現在、日本人3名と現地スタッフ12名が勤務しています。

イスタリフ村（カブール県）

寺子屋の自立まであと少し



室内にきれいに陳列された
イスタリフ寺子屋で製作された商品

2003年の活動開始以来、イスタリフ村で寺子屋の輪は少しずつ広がってきました。今まで寺子屋活動が行われた集落は累計15ヶ所、卒業者は800名以上にのぼります。今年の春から、現在の寺子屋も含め、新たに識字教室が6ヶ所で始まる予定です。また、寺子屋では識字教室の他、生徒と卒業生と一緒に皮製カバンや、刺繍入りカーテンの製作も行っています。寺子屋で製作した商品をカブール市内で販売、その収入で新たな商品を作るための材料を買えるようになりました。イスタリフの寺子屋が自立できるまであと少しです。

センジットダラ村（パルワン県）

寺子屋に地域クリニックが開業！

村の入口にあるセンジットダラ寺子屋がオープンしてから、3年の月日が経とうとしています。たくさんの村人たちが識字クラス、仕立て屋クラスに通い、識字クラスでは500名を超える卒業生を輩出。仕立て屋クラスの費用は自分たちで作ったものを売って寺子屋の運営費を賄えるほどまでに発展しました。そんなセンジットダラ寺子屋で新たなサービスがはじまりました。それは村人が待ち望んでいた地域クリニック。今までは病院に行くのに遠くの町まで行かなければいけなかったのに、自分の村の寺子屋にクリニックが出来たので皆が大喜び。毎日行列ができるほどの賑わいで、主に村の女性・子どもたちのための医療サービスが施されています。



母親（白いブルカの女性）に
抱かれた幼児を診察する医師

チャラシアブ村(カブール県)

立派な建物がなくとも広がり続ける学びの場



民家を利用した寺子屋で学ぶ女性たち「離れて暮らしている家族に手紙を書けるようになりました！」

チャラシアブ村には現在寺子屋が7教室ありますが、実は民家を利用したものです。先生が自分の家の空き部屋を教室として無料開放しているのです。いまだ情勢が不安定で伝統的な風習の色濃く残るこの村には他の2村のような寺子屋を建設することができません。しかし、寺子屋卒業生の口コミから「学びの場」を求める人たちが後を断たず、寺子屋の数は増えています。寺子屋で識字を学んだ人たちのための「識字後教育」のニーズが高いのもこの村の特色。ミシンや刺繍、木工技術など収入向上につながるトレーニングをはじめ、生活に役立つ保健衛生や栄養に関する知識を学べる教室が人気を呼んでいます。

JICA 共同プロジェクト カブール市内の3つの寺子屋の活動も活発に！

去年の6月から9月にかけてカブール市内で3つの寺子屋“CLC (Community Learning Center)”が活動をスタート。アフガニスタンのノンフォーマル教育のモデルを作るべく、JICAと共にCLCの運営、識字局員の研修、教材開発、啓発活動などを応援しています。3つのCLCでは合計約900名の人たちが識字を学んでいます。他のプログラムも盛んで、裁縫、電気修理、理容、コンピュータなどの技術訓練からサッカー、卓球、バレーボールなどのスポーツ、料理教室やユースグループ活動までバラエティに富んでいます。

これら3つのCLCは建物や敷地の規模が大きいこともあり、コミュニティー学習センターとして日本の公民館的な役割を果たし始めています。“CLC”という言葉も人びとの間に浸透しつつあります。今まで学ぶことを禁じられていた女子、女性の利用者が多いのが特徴。識字の勉強だけではなく、スポーツ、会合、イベントなどさまざまな目的で活かされているCLCは、アフガニスタンの他の地域にも紹介して全国に広げてほしいとの声が現地教育省識字局からもすでにあがっています。



識字教室に参加する学習者は8割が女性です



去年の11月に千葉理事が紹介した卓球が寺子屋に通う女性の間で人気！



子ども向けコーラン(イスラム教典)のクラスもあります



時には料理教室の開催も。今日のメニューはマントゥー！(羊ひき肉と韭菜入り蒸餃子)

過去のアフガニスタン教育支援情報は [こちら](http://www.unesco.jp/afghanistan/topics.htm)
アフガニスタン事務所のホームページは [こちら](http://www.unesco.jp/afghanistan/index.html)



社団法人日本ユネスコ協会連盟
アフガニスタン教育支援情報